

## 予備、司法試験合格者メッセージ集

予……予備試験合格体験記

司……司法試験合格体験記

17……2017年度

18……2018年度

19……2019年度

### 1 独学は避ける

#### (1) 学習効果が低い、迷走する危険

- ① 大学や法科大学院の授業を真面目に受けていれば、司法試験には自然と受かるだろうと楽観視していたのだが、伊藤塾に入塾してどんどん力をつけていく周囲の友人をみていて、合格のためには腰を据えた受験勉強が必要だと認識し、大学3年のスタート時に入塾した（19司249頁）
- ② 大学の法学部に在籍していたころ、独学を試みた。大学の講義と基本書をベースに、それらのインプットを中心に据えて学習していた。しかし、問題演習に触れなければ事案を処理できるようにならず、基本書の錯綜した論点やわかりにくい説明に辟易していたため、大学3年秋に伊藤塾に入塾した（19予148頁）。
- ③ 法学部に入学した後しばらくは自力で予備試験合格を目指していた。しかし、独学だけでは半年も過ぎると、どうしても限界を感じたことから、1年の春休みに伊藤塾に入塾した（19予356頁）。
- ④ 大学に入学して法律の授業を受けていくうちに、法律知識の膨大な量に、独学での勉強が難しいと感じ、大学2年のとき伊藤塾に入塾した（19司270頁）。
- ⑤ 大学に入学し、独学で一から勉強することの現実的な難しさを知った。大学の講演で塾長の話を聴き、塾なら部活やバイトと両立しながら司法試験を目指せると考え、入門講座を受講し始めた（18司65頁）。
- ⑥ 大学1年生の間は独学状態で勉強していたが、重要な分野か否かもわからず、メリハリもなく、大学の講義も時間の制約から試験対策には不十分であり、困っていた。大学1年生の2月、友達に誘われるがまま塾を訪れ、悩みを解決してくれると知り、入塾を決意した。友達に誘われていなければ今日合格できていたとは思えない。（18司56頁）。
- ⑦ 学部の授業は学問的すぎるうえメリハリがなく、司法試験に合格するための勉強法として正しいのか不安となり、司法試験合格を目標に据えた勉強の仕方が必要だと考えるようになったため、大学2年生の時から塾に通い始めた。（18司63頁）。

- ⑧ 大学に入学してみると、法律の授業の大半が何を言っているのかよく分からず、大学の授業だけで司法試験を受験するのは無理だと思った。そこで、大学1年生の終わり頃に入塾を決めた(18 予 52 頁)。
- ⑨ 大学入学当初、受験指導校を利用することは予定していなかったが、独学では何が重要なのか、どこまで覚えるべきなのか把握できず、ペースをつかむのも困難に感じたため、入塾を決めた(17 司 250 頁)。
- ⑩ 司法試験は、性質上独学では合格からは程遠い明後日の方向にいつてしまう蓋然性が高い試験である。特に論文についてはその傾向が顕著(17 司 347 頁)。
- ⑪ 大学入学当初は、独学でも法律系サークルの勉強会に所属していれば司法試験に合格できると思っていた。しかし、実際には思う様に勉強がはかどらず、理解したようで理解できていない点もたくさんあった。大学2年生の秋に入塾して、基礎マスターテキストである「入門講義テキスト」を何度も読み直し、覚えるまで徹底的に読み直したところ、大学の成績も上がっていくのがわかった(17 司 366 頁)。
- ⑫ 独学で合格しても何の得にもならないし、合格まで時間がかかる。できるだけ早期に決着をつけなければ長引き辛さは増すだけなので、法曹になると決めたら塾に入った方が賢明(17 予 92 頁)。

## (2) 市販の教材のみによる学習

- ⑬ 当初、基本書を繰り返し読むことで基礎知識を身に付けようとしたが、長い時間をかけたにも関わらず、はじめての予備試験短答であえなく不合格。その敗因として、どの部分が重要で、重要でないのかメリハリのあるインプットが出来なかったことにあった。合格した今、より効率的にインプットするには司法試験に特化した教材で勉強することが鍵となると、確信を持っていえる(19 司 215 頁)
- ⑭ 基礎となる学習は、基本書を何度も通読することによって行った。これには膨大な時間を要したほか、基本書を一周するだけでも時間がかかるため、再読の際に内容をほとんど忘れてしまっており、かなり効率が悪かった。基本書は各科目の見取り図としては役立ったのかもしれないが、実際の点数にはつながらなかった(19 司 216 頁)
- ⑮ 基本書を読んでもページが進まず、事例問題の解き方も確立できなかった。自信が持てないまま時間が過ぎていくことに焦りを感じ、学部2年の途中から伊藤塾で受講しはじめた(19 司 74 頁)。
- ⑯ 基本書を使って独学で学習することは自分には到底無理だと思い、先輩に相談したところ、受験生は伊藤塾に通っている人が多いと教えてもらった。体験記を読み、インプットからアウトプットまで一貫した講座が揃っており、質問受けなどの個別指導もあることが決めてとなり入塾した(19 司 186 頁)。
- ⑰ 大学1年の頃、大学の授業では基本書が指定され、それを4月頃読んだりもしたが、勉強が苦痛でしかたなかった。そんな中、5月から塾に通い基礎マスターテキストを使

った学習に切り替えてから、法律の勉強が楽しくなった。おかげで大学の法律教科の成績もAが9割程取れ、法科大学院への進学の間でGPAに困ることはなかった(17頁250頁)。

### (3) 受験指導校を利用するメリット

- ⑱ 受験指導校というのは受験に必要なテクニックを教えてくれるようなところ、などというあまりよくないイメージを持っていたが、実際に講義を受講してみると、それは勝手なイメージにすぎず、法律をわかりやすく、そして効率よく勉強できる素晴らしい場所だということに気づいた(19司168頁)
- ⑲ 様々な試験を独学で行ってきたため、塾は必要なく、独学で勉強するのが一番効率がよいと考えていたが、伊藤塾に出会い、講義を受けることで、それまでの自分の考えが完全に変わった。塾では、受験のプロである講師が過去の塾生から得た膨大な情報や毎年の試験動向を詳細に分析し、それを合格に必要な十分な知識のかたちにして塾生に最小限の時間で教えてもらうことができ、市販の本を基に独学で試験対策をするよりも効率的に勉強することができた(19司212頁)。
- ⑳ 在学中は法科大学院に入学して司法試験に合格するつもりであったため、塾を利用するつもりは全くなかったが、法科大学院入試で不合格だったため予備試験ルートに切り替え、塾を利用し始めた。法学部だったため、基礎はそこそこ身につけていると思い込んでいたが、基礎マスターを受講してみると知らないことがたくさんあり、自分の基礎は穴だらけだと気づいた。それからは、基礎マスターをWeb受講しその復習を繰り返すを行い、磐石な基礎を築いていった(19司176頁)
- ㉑ 司法試験に合格するには独学では間違った方向へ進んでしまいかねず、しっかりとした受験指導校で勉強することが必要だと考え、大学1年の時に入塾した。早めに入塾したことで、ある程度の余裕を持って勉強を進めることができたので、合格に役立った。もし1年以上入塾が遅れていれば、勉強が追いつかない可能性があったため、生活に余裕のある1年のときに入塾するのが一番のおすすめ(19司220)
- ㉒ 伊藤塾に入塾しなければ予備試験合格は不可能だった。余程の天才なら別だが、普通の人で独学で予備試験を合格するのは本当に至難の業だと感じた(19予361頁)。
- ㉓ 伊藤塾のような受験指導校は、体系的にコンパクトかつ必要十分な情報量を網羅したテキストに加え、わかりやすい講義を聴くことができ、はじめばかりで法律の全体像や勉強の進め方のイメージが出来ていない段階では道しるべになってくれる。これは、独学や大学の授業で学ぶことと大きく異なり、かつ有益な特殊性だと思う(19司162頁)。
- ㉔ 司法試験や予備試験については、重要論点を網羅的に分かりやすくカバーした市販のテキストがあまりない。特に論文式試験については、市販のテキストだと難しい内容の答案例が掲載されているだけで、実際にどの程度のレベルの答案を書ければ合格レベル

に到達できるかを独学で知ることは大変難しいと感じた。その点、伊藤塾の論文マスターは予備試験を分析し知り尽くしたプロの講師の方々が有用な知識を余すことなく伝えてくれるので、残された少ない時間で最大の効果を出せるよい教材だと思う。金銭的な面で迷っている方もいると思うが、試験に受かってしまえば後でいくらでも挽回できるので、人生で最も大切な時間を浪費してしまわないよう、自分への最大の投資だと思って受験指導校を上手く活用するのが一番の合格への近道になると思う。(18 予 229 頁)。

- ②⑤ 法学はどの科目も一応の水準に到達するまでが大変で、独学ではかなりの苦労が必要だと思う。基礎マスターの受講により、塾を利用していない人に比べると学習面で相当の効率化を図ることができ、余計な労力を払わずにすんだ (18 司 69 頁)。
- ②⑥ 伊藤塾に入る前に自分で勉強していた際はなかなか全体像がみえてこないうえに、自分がやっていることが的外れのように感じたりもして不安だったが、基礎マスターは全体像を示しながら解説し、重要度もランク付けをしてくれるので安心して効率よく学習することができた (17 司 128 頁)。
- ②⑦ 書籍のみによる独学ではなく、基礎マスターや論文マスターといった講義を受け、優秀な講師の方々の指南によって勉強を極限にまで効率化することで、学生の方はもちろん、忙しい社会人の方も最終合格を果たされることは決して困難なことではない (17 予 90 頁)。

## 2 仕事・家庭を両立させるための学習方法

### (1) 両立させるための考え方

- ① 仕事をしている方が法律の勉強をする場合、仕事と何かしら関係している内容が多くある。学生よりも社会経験が多い分、理解・知識を定着させやすいと思う (19 司 27 頁)
- ② 社会人であるため残業などで時間がうまくとれないときでも、「毎日5分でも！」を自らに課し、会社への行き帰りの時間も活用しながら、結果「30分以上の勉強」を4年間続けることができた。とにかく「無理せず、少しでもよいから継続する」というスタンスが重要 (18 司 24 頁)。
- ③ 時間が限られているため、かえって集中して復習(主に暗記)が進んだ。仮に職場までの往復で1時間電車に乗るとすれば、1週間で5時間の時間が生まれる。これは結構大きい (17 司 55 頁)。
- ④ 仕事のメールや資料は事実を評価して問題提起する、三段論法を使うなど、論文を意識した手法で書く力を鍛えた (19 予 94 頁)
- ⑤ 塾には、電話で「スケジューリング」というフォロー制度があり、勉強に関する相談に乗ってくれるので、通学できない自分でも安心して勉強を進めることができた (17 予 45 頁)。

## (2) 計画と期限を設ける

- ⑥ 社会人の方は時間が確保しにくいかもしれないが、しっかり計画を立てて、合格ではなくその計画の達成を目標に進めれば合格できる。伊藤塾のカリキュラム、教材に絞って進めれば方向が逸れることはないので大丈夫（19 予 63 頁）
- ⑦ 仕事に支障を生じさせない必要があるため、学生と違うということを忘れずに勉強の計画を立てるのがポイント。社会人は納期までの一定水準の成果を出すのは得意なはずなので、それを学習に活かせるのは、逆に強みとなる（19 予 294 頁）
- ⑧ 日中は仕事があり、どうしても残業しなければいけない時期もあったので、勉強の計画は余裕をもって、一週間単位でこなすことができる分量を決めて実行していた（19 司 65 頁）。
- ⑨ 仕事と学習を両立させるために、4年間という長い期間で予備試験合格の計画を立てた。長期的なスパンで考えることで、勉強に焦りを感じずに取り組むことができた。また、仕事も勉強も楽しみながらすることが大事（19 司 40、41 頁）。
- ⑩ 働きながら学習するために重要なのは、最低限必要な勉強に絞り込んで、計画を立ててそれをやり抜くことだと思う（18 司 225 頁）。

## (3) 一日の学習スタイル

- ⑪ 平日机に向かって勉強ができる時間は多くて3時間だったため、そこに時間を充てることができるよう、早朝始業前1時間前に出社し1時間目の講義を聴き、帰宅後残り2時間を聴く、早朝答案を書き帰宅後解説講義・復習を行うなどの時間調整をした（19 司 26 頁）。
- ⑫ 使える時間を最大限利用して、効率よく学習することを強く意識し、自分が夜型で外に出ることが好きな性格だったこともあり、仕事が終わる次第、いつもよく行くカフェに直行して閉店まで学習してから帰ることをルーティンにしていた（19 司 31 頁）。
- ⑬ なるべく朝勉強するよう心がけた。電車の中でも勉強した。また仕事が終わった後も、カフェや図書館で毎日勉強をしていた。働いていると勉強時間が圧倒的に少なくなるので、毎日することが大切（19 司 60 頁）。
- ⑭ 平日は、行き帰りの電車の中や、朝の定刻までの時間、お昼休憩の時間に、旧司法試験の問題をひたすら解くようにしていた。また、テキストでの基本事項の確認も、できる限り電車で行っていた。平日にまとまった時間を確保できない分、休日は、司法試験の過去問やペースメーカー論文答練の問題を1日2～3問起案し、復習もその日のうちに終わらせるようにしていた（18 司 84 頁）。
- ⑮ 早起きをして出勤前に開いている飲食店を利用しての学習や、昼休みも同様に喫茶店などでの学習に努め、もっとも勉強時間が取れる夜間は、自宅に戻らずに公共図書館や飲食店などを利用して学習をするようにした。そのような場所では、同様に何らかの資格を目指して学習しているサラリーマンも多く、互いに言葉を交わさないものの、励み

になった (18 司 100 頁)。

- ⑩ 自分はフルタイムの社会人受験生だった。毎日会社ではいろいろあるため、仕事が終わると心身ともに疲れてしまい、この状態で家に帰っても勉強に向かうことは困難だった。そこで、会社の近くに有料自習室を借り、仕事帰りに、機械のようにとにかく自習室に行くようにした。たとえ疲れて勉強する気がなくても、とにかく自習室に毎日行くということが重要だと思う。仕事帰りに、暗い道を自習室に向けて歩いているとき、「自分はなんでこんなことをやっているんだろう」と思うこともあったが、合格できた今、諦めなくてよかったと心から思っている (18 司 223 頁)。
- ⑪ 社会人の場合、学習に割ける時間が限られてしまうが、とにかく使える時間を最大限利用して効率よく学習することを強く意識した。仕事が終わる次第、いつも行くカフェに直行して閉店まで学習してから帰るということをルーティンにしていた。そして、休日だけでなく、平日も僅かな時間や寝る前の数分であっても必ず何か法律に目を通すことを意識した (18 予 24 頁)。

#### (4) 時間不足への対応

- ⑫ 会社への往復 2 時間がほぼ唯一の勉強時間だったので、電車の中でひたすら勉強していた。六法も模範六法のアプリを入れ、電車を降りた後の徒歩の時間は、音声で学習していた (19 予 48 頁)
- ⑬ 通勤電車、駅に向かう時間などを活用することで勉強場所にしばられないことが重要。さらにスキマ時間を見つけ出し論証集の確認や条文素読を行い、短答の勉強は電車での通勤時間で完結するようにし、残りの時間は論文式の勉強や起案に充てられるようにしていた (19 司 155 頁)。
- ⑭ 社会人は、可処分時間が極めて少ない方多いと思うので、勉強する教材を絞り込んで何回も繰り返すことが大事 (19 予 93 頁)
- ⑮ 朝の数時間、帰ってからの数時間、昼休み、外勤の移動中や空き時間などをかき集めることで、時間を確保した。他にも、結婚、転居、など、私生活上も様々な動きがあったが、入門段階できちんと基礎固めをしておいたためか、その後の論文対策など、細切れの時間を活用しながら乗り切れたように思う (17 司 23 頁)。
- ⑯ 平日はフルタイムで仕事をし、残業も多く、短い勉強時間で試験合格という目的との関係で、勉強の効果を最大化することを常に考えて、基本書や判例集などには、意識的に手を出さないようにしていた。社会人は時間的制約があることで選択と集中の必要性を明確に意識できた (17 司 25 頁)。
- ⑰ 仕事が終わった後に基礎マスターをインターネットで受講していたが、やはり仕事の疲れで内容が余り入ってこなかったり、理解できないことがあった。ただ、伊藤塾の講義はスマートフォンで視聴することが可能なので、よく理解できなかった部分は翌日出勤の電車の中で聴き直して復習することができた (17 予 94、95 頁)。

- ②④ 家事や育児の関係上、まとまった時間や、机に向かって勉強する時間が取れないことが多かった。そこで、スキマ時間を活用したり、自分で要約した論証などを読み上げソフトで音声ファイル化して勉強することがメインだった。机に向かって勉強する時は、答案を書くときだけだった（17 司 333 頁）。
- ②⑤ 家事などで机に向かっていられない時間が多い環境の中、少しでも学習時間を捻出しようと、基礎マスターの講義を録音し、家事や移動時間には欠かさず毎日何度も繰り返し聴き続けた（17 予 49 頁）。

### (5) 戦略的休息をとる

- ②⑥ メリハリをつけること、余計なことはしないことを心がけた。スキマ時間の学習を積み重ねるよりは、30 分以上のまとまった時間に集中できるよう、帰りの電車で 15 分程度寝るようにし、仕事後でも集中力を保てるようにしていた。また、モチベーション維持のため、昼の休憩時間には、ランチで美味しいものを食べ、飲み会も月 3 回程度は行っていた。長丁場なので、持続可能な勉強の仕方を探すことが大事（19 予 25 頁）。
- ②⑦ 時間の捻出と集中力がポイント。飲み会には原則行かず、早朝、移動時間、夜、休日などを中心になるべく勉強に充てる。体調管理は必須なので、講義を聴きながらの運動の時間を確保しつつ、たまに銭湯に行ってリラックスする時間を設けた。そして、捻出した時間内で、今勉強している箇所は本試験まで二度と見られないかもしれないと思いながら、集中して勉強した（19 予 252 頁）。
- ②⑧ 肉体的疲労が障害になるので、眠いのには勉強する時間を作らないこと。短期的には乗り越えられるが、長く続かない（19 司 240 頁）
- ②⑨ 仕事をしていたため、勉強時間に充てられる時間に限りがあったため、手持ちのテキストと過去問以外には手を広げないことを意識していた。また、受験勉強は、体力勝負の面があるので、筋トレやランニングなど、毎日 30 分は必ず運動をしていた（18 司 128 頁）。

## 3 ロースクールへ向けた塾の活用

- ① 法科大学院では、民法については、基本書は使わず、伊藤塾のテキストのみで最上位の成績をとっていた。伊藤塾は司法試験に必要な基礎的情報を提供してくれる場であり、その情報を 7～8 割理解、暗記し、法科大学院の授業に臨めば、他人より得るものは大きい（19 司 77 頁）。
- ② 法科大学院に通うようになってからも、基礎マスターテキストと論文マスターテキストは適宜戻って復習するために愛用した。法科大学院に通い始めて周りの学生と比べても、最初に基礎知識を叩き込んであることが、大きなアドバンテージになっていると確信した（19 予 224 頁）

- ③ 授業や期末試験も、伊藤塾のテキストで足りる科目が多かった。気になった点、細かい点を基本書でいちいち確認していたが、あまり成果には結びついたとはいえ、基本を見失わず学習するとよい (19 司 115 頁)
- ④ 受験的な知識については基礎マスターで必要十分。法科大学院では発展的な知識も学習することになるが、司法試験的にそれが必要な知識なのかを確認する際の羅針盤として基礎マスター、論文ナビゲートテキストで掲載されているかを確認していた (19 司 113 頁)
- ⑤ 伊藤塾での勉強は常に試験を意識した羅針盤のようなものであり、これをベースに据えることで、常に試験の意識を持ちつつ法科大学院での最新の情報やより深い知識を試験に活かす形で修得することができた。試験とは関係のないことにのめりこんでしまっても、すぐに軌道修正することができた (19 司 119 頁)。
- ⑥ 法科大学院には受験指導校批判をしてくる先生も一部にはいたが、やはり伊藤塾のテキストはよくまとまっていてわかりやすかったため、周りの友達もわからないことがあれば基礎マスターのテキストを開いて確認していた (19 司 121 頁)。
- ⑦ 伊藤塾を利用したことで、法科大学院の授業だけでは得られなかった法律的な文章の作成能力が高められた (19 司 131 頁)。
- ⑧ 法科大学院入学前に伊藤塾のテキストを徹底的に復習したことで、法科大学院の授業にも対応することができた。法科大学院の定期試験対策としても基礎マスターを利用した (18 司 57 頁)。
- ⑨ 法科大学院入学前に基礎マスターを受けていなければ、予備試験どころか法科大学院の授業を理解することもできなかつた。授業でよく分からなかつたところについて、該当部分の基礎マスターを再度聴くと授業の内容がよく理解できたので、法科大学院の授業の復習としても役立った (18 予 81 頁)。
- ⑩ 伊藤塾の講義は、自分のやり方次第では法科大学院の授業にも活用することができ、それが一番司法試験対策としても有効だと思うので、中途半端に、法科大学院に入ったから安易にテキストから基本書に乗り換えるといったことはあまりおすすめしない (18 司 65 頁)。
- ⑪ 基礎マスターテキストと論証パターン集に、法科大学院で習った知識を追加して書き込んだ。法科大学院のみのノートは、法科大学院のテスト対策には使ったが、司法試験の勉強には使わなかつた (18 司 181 頁)。
- ⑫ 法科大学院入試までに伊藤塾で基礎を固めていたが、今思えば、法科大学院入学までのこの時期にしっかり勉強して受験生の中である程度の順位につけておくことが非常に重要。というのも、法科大学院に入ると、基礎の勉強ができていないために授業についていけず、理解が遅れ、課題の処理に手こずり忙殺されたりして悪循環に陥り、つぶれていく学友を何人も見た。自分は入学時点で早稲田大学法科大学院に全免で合格するだけの実力がついていたり、法科大学院では遊びや趣味も充実させることがで



きた (17 司 132 頁)。

- ⑬ 法科大学院の時は、授業についていくのが精一杯だったが、ここでも常に大学時代に受講した伊藤塾の基礎マスターテキストを活用した。このテキストは勉強のはじめから終わりまで繰り返し使える (17 司 145 頁)。
- ⑭ 伊藤塾の講義を受けていれば、学部・法科大学院の授業でも他人よりも有利な位置でスタートを切れるので、自然と学校の成績も良くなる (17 司 168 頁)。
- ⑮ 法科大学院の定期試験では基礎的な事項も問われる。この点、伊藤塾の講座をしっかりと受講しておいたため、問題なく全課程を修了することができた (17 司 345 頁)。
- ⑯ 伊藤塾の基礎マスターは、その後の法科大学院の授業や、教材変更後の学習においても、知識を積み上げる土台として大変有用 (17 司 351 頁)。
- ⑰ 伊藤塾の教材は素晴らしくまとまっている。伊藤塾での学習をきちんとこなせば、法科大学院で新しいことを聴いてもよく吸収できる (17 予 199 頁)。

## 4 塾だけで十分、他の指導校は必要なし

### (1) 伊藤塾という選択

- ① 当初は別の受験指導校を利用していたものの、成績が伸び悩んでおり、合格に時間がかかってしまった。これから司法試験を目指される方は無駄な勉強をしないように、伊藤塾講師のアドバイスを真摯に受け止めて、まっすぐに合格に向けて努力してほしい (19 司 179 頁)。
- ② 最初は知り合いのすすめと通学のしやすさで他の受験指導校を利用したが、講義スタイルが合っていなかったため、いまひとつ法律というものが理解できなかった。次に価格の安さで別の受験指導校を受講したが思ったほどの効果がなく、心機一転伊藤塾の利用を開始した (19 司 213 頁)。
- ③ 塾以外の受験指導校で入門講座を学習したものの、しっかりと勉強したとはいえなまま法科大学院に入学。そこで同級生の多くが伊藤塾の入門講座を受講していたことを知り、驚くとともにとても後悔したことを覚えている。結局基礎学習段階で知識が定着していなかったため、特に理解が怪しかった商法については、伊藤塾の入門講座を受講した。(19 司 156 頁)
- ④ 勉強をはじめるとにあたって最初の入り口を間違えてはいけないと慎重に考えた結果、伊藤塾に決めた。合格した今、その判断が間違っていなかったと思っている。司法試験は相対評価であるため、受験生の多くができるはずのことを外さないことがまず第一であり、伊藤塾の講座はそのニーズに十分応えるものだったと思う (19 司 113 頁)。
- ⑤ 最近では他の受験指導校も増えているが、伊藤塾ほど基礎のインプットがうまく設計されているところはない。基礎マスターに載っていないなら、知らなくても仕方ないと割り切れる (19 予 266 頁)

- ⑥ 伊藤塾は、他の受験指導校と比較しても、カリキュラムの充実度、母体数の大きさ、テキストの精度など一番安心して利用できる場所だと思う（19 予 322 頁）。
- ⑦ 全くの無知から他校と比較することもなく伊藤塾を選んだが、最善の選択をしたと思っている。全くの初学者であった自分が、一から勉強して予備試験に合格するまでになったのは、伊藤塾のカリキュラムがあったこそ（19 予 27 頁）。
- ⑧ 浮気をすることなく、伊藤塾の授業とテキストを信じて学習してきて、本当によかったと思う。勉強の過程で法曹への夢も膨らみ、将来の目標も定まってきた。このまま司法試験合格まで走り抜けたと思う（18 予 129 頁）。
- ⑨ 伊藤塾を選んだのは、いろいろ手を出すことなく、ここのテキストなどを信じてしっかり勉強すれば合格にたどり着けると思ったからだが、実際に合格できて、自分の選択は間違いではなかったと思った（18 司 33 頁）。
- ⑩ 実際に本番を終え、また合格することができた現在では、伊藤塾で必要十分という考えは、よりいっそう強いものとなっている。せっきく伊藤塾を利用している皆さんには遠回りしてほしくない（18 司 45 頁）。

## (2) 伊藤塾のメリット

### ア 短期合格に必要なノウハウが得られる

- ⑪ 伊藤塾が予備試験、司法試験対策の受験指導校の中で素晴らしい実績を有していることからわかるように、伊藤塾のカリキュラムには、予備試験などの短期合格のエッセンスが詰まっている。効率的に勉強することができたという点で、伊藤塾を利用してよかった（19 司 58 頁）。
- ⑫ 伊藤塾を利用しなければ、スムーズに学習を進め、無駄なく最終合格にたどり着くことができなかった。伊藤塾のガイダンスのときに教わったメリハリのある学習を最後まで貫くことができたおかげで、早期の合格にたどり着くことができた（19 司 29 頁）
- ⑬ 司法試験は、才能や地頭のよさがなくとも、適切な努力を継続すれば合格できる試験だと思う。しかし、努力の適切さは勉強の開始時点ではなかなかわからないため、伊藤塾の講座を受けることで、適切な方向に向かっていける（そこで悩まなくてよくなる）のは大きなアドバンテージ（19 司 90 頁）。
- ⑭ 伊藤塾を利用したことで司法試験・予備試験に関する多くの情報を手に入れることができた。勉強の仕方、スケジュールの立て方、利用すべき教材の種類、周りのレベルの把握といったことができなかったら、司法試験に合格することは難しかった（19 司 107 頁）。
- ⑮ 自分は入塾するまで一切の法律の勉強をしたことがなく、論文試験に合格するまでは伊藤塾の教材以外を使用することがなかったため、合格に必要な知識やスキルのほぼ 100%を基礎マスターと論文マスター、各種答練、過去問演習で身に付けた（19 司

37 頁)。

#### イ 圧倒的シェアによる安心感、メリット

- ⑩ 伊藤塾の利点は多々あるが、大きな点として業界における圧倒的なシェア率がある。予備試験は相対評価の試験なので、受験生の大半ができなくても合否には影響しないが、大半ができる問題で間違えると大きく差をつけられてしまう。塾を利用している受験生が極めて多い以上は、伊藤塾で扱った問題＝受験生の大半ができる問題という現象が生じている。ゆえに、塾で勉強して他の受験生に差をつけられないようにしておくことは合格のために極めて有益 (19 予 61 頁)。
- ⑪ 数ある受験指導校で伊藤塾を利用する最大のメリットは、ともに司法試験を目指すライバルの数にある。答練やゼミなどライバルたちの中で自分がどのくらいに位置するのかを常に意識して勉強することは、伊藤塾だからできた (19 予 36 頁)。
- ⑫ 伊藤塾の口述再現集は口述受験生にとって必携のものと思うが、他校・市販教材でこれに代替できるものはなく、この面で現状、伊藤塾に追随できるところはない。この点も、やはり伊藤塾は流石で、司法試験対策に関しては他校とは一線を画していると思う (18 予 213 頁)。

#### ウ 勉強法で悩まない

- ⑬ 伊藤塾に入ってよかったと思う点は、安心感。実績ももちろんだが、在学中の司法試験合格に向けた、明確なプランを立ててもらっているため、大卒の勉強計画で迷うことがなかった。試験制度改革が行われており受験生は戸惑うこともあるかと思うが、伊藤塾に入っているのであれば、合格するまでやるべきことを淡々と続けていけば大丈夫 (19 司 53 頁)。
- ⑭ 司法試験に受かるためには、正しい勉強の方向性×一定の勉強量が必要。伊藤塾のカリキュラムに従えば、勉強の方向性を誤ることがなく、あとは自身で一生懸命勉強するだけになる。これが伊藤塾を利用する最大のメリット (19 司 57 頁)。
- ⑮ とにかく必要不可欠なことだけに絞って講義をし、教材を作成していただいた塾には感謝している。ただでさえやらなくてはならないことの多い司法試験対策において、勉強の範囲を絞っていただけたのは、余計なことを考えずにすみ、非常に助かった (19 予 63 頁)。
- ⑯ 無限に情報が存在する現代において、合格に必要なものを洗い出し、「あとはやるだけ」の状態にお膳立てをしてくれた伊藤塾には感謝しかない (19 予 107 頁)。
- ⑰ 予備試験受験を振り返ると、伊藤塾から言われたことを淡々とこなしていたらいつのまにか合格してしまった、という感覚。餅は餅屋という諺があるが、司法試験界に長年君臨してノウハウを多く持っている伊藤塾の講師の方々の指示に従うのが合格への早道 (19 予 367 頁)

- ②④ 昨今は学習法について非常にたくさんの方が情報を発信している。それらの情報の中には、受験生の不安を煽るもの、個人的な見解を過度に一般化するもの、ひいては司法試験を経験していない方の意見も多い。周囲の無責任な言論に惑わされず、プロの講師の方々を信頼して突き進むことが大事（18 司 53 頁）。

#### エ 費用対効果の高さ

- ②⑤ 予備試験合格はもとより、大学の定期試験対策、法科大学院の入試対策まで全て伊藤塾にお世話になった。テキストの内容もさることながら、スタッフの対応もよく、入塾して本当に満足している。授業料はちょっぴり高かったけれど、それを大きく上回る質的サービスだった（19 予 146 頁）
- ②⑥ 伊藤塾は本当に多額ですが、サービスは本当に素晴らしいと思います。一生懸命勉強すればするほどお得になる仕組みで、モチベーションも上がります。Web 上で励ましの言葉をくれたり、試験会場まで応援に来てもらったり、精神的にも非常に支えられた（19 予 216 頁）
- ②⑦ 大学 1、2 年生で受験指導校の費用をアルバイトで貯め、大学 3 年生から伊藤塾に入塾し、無駄のない効率的な勉強をすることができた。司法試験はただ、がむしゃらに勉強することが合格への道ではない（19 司 252 頁）。

#### オ 伊藤塾の魅力

- ②⑧ 伊藤塾は業界最大手を言われている理由が、入れば分かる。こればかりはいくら人に言われても自分で決めることなので仕方ないが、法曹を目指すのであれば、早期合格も見据え伊藤塾にぜひ入ってほしい（19 司 122 頁）
- ②⑨ 業界で圧倒的シェアを誇る伊藤塾でないと友達と勉強するという機会に恵まれなかったと思うと、伊藤塾を選択してよかったと思う（19 予 33 頁）。
- ③⑩ 教養学部出身で基礎のおぼつかなかった自分にとって、しっかりした基礎固めができる伊藤塾を最初に選んだことは、今でも正解だったとお世辞でもなく、本気でも思う（19 司 72 頁）。
- ③⑪ 試験に必要なことはすべて伊藤塾で修得することができた。また伊藤塾には勉強を継続する環境も整っている（19 司 30 頁）。
- ③⑫ 「真の法律家を育てる」という理念を、ただ理念として掲げるだけでなく、それを実体の伴うサービスとして提供している受験指導校は伊藤塾だけ。地方受験生である自分にとって、受験指導校は伊藤塾以外にはありえなかった（19 予 260 頁）。

## 5 磐石な基礎を作る

### (1) 磐石な基礎力の重要性

- ① 「磐石な基礎力」。試験で必要なものはこれだけで、他はどうでもいい。試験では、短答・論文・口述を通じて、この基礎力をしつこく繰り返し確認される。基礎力とは、塾の入門講座で「ここは大事」「ここを覚えて」と言われたところや、A・B+ランクのところを理解し記憶し続ける能力。まさかと思われるかもしれないが、それさえもできない受験生が大半。ここを勘違いして、基本書、学者の論文、他の受験指導校の講座に手を出すと致命傷となり、合格が遠のく。いろいろな情報が手に入るが、何千人もの合格者を生み出した塾のメソッドの方が、合格に直結するのは明らか（19 予 153 頁）。
- ② 基礎マスターに載っている知識を、自分で使える・話せるレベルに持っていけば短答・論文・口述すべての試験の合格に近づくだらうと、1年の夏に気づいた。試験勉強では、結局基礎マスターのうち、講師が高いランクをつけた箇所やマークした箇所をどれだけ思い起こせるか、どれだけ基礎中の基礎を住所や電話番号のレベルに近づけることができるかの勝負だと思う（19 予 28 頁）。
- ③ 合格者の言う勉強方法という「枝葉の部分」を、相手の善意からすすめられるがままに、そのまま何も考えず漫然と鵜呑みにして実行していくのは大変危険。この試験では、基礎知識をどれだけ血肉化して使いこなせるか、出題者の問いかけている問題意識に本気で正面からぶつかれるかが問われていると感じる（19 司 114 頁）。
- ④ 基礎を軽視せず誠実な姿勢で常日頃勉強していれば、本当に短期間で予備試験に合格できる実力をつけることができる。だからこそ、この「磐石な基礎」を習得することをただひとつの目標として日々勉強していた（17 予 37 頁）。
- ⑤ 勉強開始当時から「司法試験は基礎が大切」という言葉を常に聞いており、その言葉を信じて基礎を重視した勉強を心がけていた（17 司 82 頁）。
- ⑥ 伊藤塾で、学習の最初から方向を誤らずに基礎を固め、答案を書く経験を積むことができ、無事合格することができた。伊藤塾で基礎を固めていれば大丈夫（18 司 193 頁）。
- ⑦ 伊藤塾に高いお金を払った以上、とことん活用してやろうと考えていた。また、自分で独学は無理だと考え伊藤塾に入ったので、余計なことは考えず、講師に言われたことだけを実践しようと思った。今、思うとこれが、磐石な基礎力に結びついたのでと思う（18 予 48 頁）。

### (2) 合格するために必須な「磐石な基礎」

- ⑧ 司法試験の勉強で最も大切なことは「正確な知識を身に付けること」。試験で発展的な論点ばかり問われていると思いがちだが、条文の趣旨や判例の知識といった基礎的な部分を問われているケースも多く、基礎力の差で合否がわかることが多い（19 司 188 頁）。

- ⑨ 実際に合格してみて実感しているが、司法試験は基礎的な部分をどれだけ徹底できるかが勝負の分かれ目。何よりもまず、基礎的な知識や能力を身につけ、どんな問題が出てきたとしても10割でなく7割で対応できるようになってほしい(19司185頁)。
- ⑩ 学習が進んでくると、応用問題や現場思考問題に目が向いてしまう受験者がいるが、これは不適切。「試験は基本問題が7割」と言われるが、司法試験でも例外ではなく、基本の7割の部分すべて正確に解ければ確実に上位に合格できる普通の試験(19司310頁)
- ⑪ 基礎・基本を徹底してそれを答案に反映する。これで合格できると試験が終わった今、実感している(17司315頁)。
- ⑫ 今年の司法試験は例年と出題傾向がガラッと変わった年だったが、基礎・基本を答案に示すことができたため合格することができた。これから受験される方は、基礎・基本を軽視せず自分のものにしていただければと思う(18司58頁)。

### (3) 基礎マスター・論文マスターによる磐石な基礎固め

- ⑬ インプットは伊藤塾の基礎マスターテキストで行った。基礎マスターテキストには予備試験、司法試験に必要な知識がすべて記載されているため、この知識を完璧に定着させることが大切であると考え勉強していた(19司49頁)。
- ⑭ 司法試験は基礎的な理解の差で合格が左右される試験だと言われているため、応用的な問題よりも基本的な論点の把握・知識の修得に主眼を置き学習した。受かるために活用したツールが入門講座(基礎マスター)。講座名は入門だが、ここに書かれていることを答案に反映させることができれば司法試験に合格することができる(19司79頁)。
- ⑮ 基礎マスターといって侮るなかれ。その内容は多岐にわたり、合格後も折に触れて読み直している。基礎マスターによって磐石な基礎が築かれ、それをもとに論文マスターで論文の書き方を学んでいく。よくできていると思う(19司102頁)
- ⑯ すでに弁護士になっていた法科大学院時代の同級生のすすめもあり、塾長の基礎マスターを受講した。これにより基礎的知識の修得にとどまらず、法律的問題に対する解決アプローチを学ぶことができた。素直に言って、伊藤塾長の基礎マスター受講がその後の予備試験、司法試験の一発合格に直結した(19司158頁)
- ⑰ 予備試験では、伊藤塾で身に付けた知識をもとに、自分の頭でしっかりと考えて答案を書くことを心がけた結果、論文では二桁前半という順位で合格することができた。基礎マスター、論文マスターで磐石な基礎を固めたことがよかった(19司57頁)。
- ⑱ 基礎マスターの情報量が多いが、ほとんどすべての基礎知識・論点が掲載されているため、これさえ正確に理解すれば怖いものはない(19司258頁)
- ⑲ 基礎マスターを受講したが、基礎がぐらぐらのまま法科大学院生活を送り、一度目の司法試験に失敗、二回目の挑戦で再び基礎マスターに頼ることにした。基礎に自信がない人は、今すぐリセットすべき。だらだらと難しいことをしても身につかないので効率

が非常に悪い。本当に必要な知識は基礎マスターレベル（19 司 264 頁）。

- ⑳ 試験を受け終わって痛感したのは、基礎の重要性。勉強していると発展的な分野を深追いしがちだが、B+以上の重要な論点や定義、判例を確実に押さえることが大切で、発展的な分野では差がつかない。多少の遠回りはやむを得ないとしてもいつも基礎に戻るという姿勢が大切（19 司 42 頁）。
- ㉑ 伊藤塾長の教え通り、記憶の定着を図るべく、可及的にその日のうちにテキストを復習し、過去問でわからない選択肢は全てテキストに戻ってチェックした。膨大な講義を8ヶ月で消化するのは本当に大変だったが、ここで手を抜かなかつたことで基礎固めができた（19 予 67 頁）。
- ㉒ 基礎的な知識の修得が必要だというと、有名な基本書に書いてあることを1から10まで覚えようとする人がいるが、そのようなものではない。合格するために必要な知識・論点は「みんなが知っていて書ける論点」であり、これらを網羅しているのは伊藤塾の基礎マスター（17 司 72 頁）。
- ㉓ 司法試験に必要なものは、①条文・判例と、②法的三段論法の2つだけ。これらは伊藤塾の基礎マスター、論文マスターを通じて修得することができる（17 司 239 頁）。
- ㉔ 基礎マスターには合格に必要な情報が網羅されている。判例・学説が紹介され、問題提起・規範に区分されていて、これだけで司法試験合格に必要な情報が集約されている。基礎マスターを徹底的に復習したことにより、学部成績も全て最高評価を得ることができた（18 司 57 頁）。

## 6 繰り返し学習

- ① 基礎的な法知識は、すべて伊藤塾の基礎マスターで修得した。基礎マスターテキストには、司法試験に必要な知識が網羅的にまとまっており、インプットの教材として非常に役に立った。この基礎マスターテキストを何度も反復して勉強することが、知識を定着させるためにとても重要（19 司 71 頁）。
- ② 司法試験では皆が書ける基礎的なところを落とさず正確に書くことが大切なので、同じ教材を何度も繰り返し、知識の精度を上げた方がよい（19 司 55 頁）。
- ③ 論文式試験の基礎力は問題研究を完璧に頭に叩き込むことで養うことができる。とにかく基礎マスターテキストでインプット→問題研究テキストでアウトプット、これを数日ずつひたすら繰り返す。それだけで十分（19 司 39 頁）。
- ④ 基礎マスターは、ぼろぼろになるまで繰り返し読み直すこと、論文マスターは、気づけば答案を覚えてしまうほどに繰り返し読み直すことで、試験に必要な知識は身につく（19 司 40 頁）。
- ⑤ 基礎マスター、論文マスターをひたすら消化し反復した。基礎知識の定着、基礎知識を論文に活かす方法が身についたと思う。論文マスターをはじめた当初は、全く論文が書け

ず苦勞したが、反復していくうちに書けるようになった。法律学習の基本部分を修得することができたのは、基礎マスターと論文マスターのおかげだと思う（19 司 46 頁）。

- ⑥ 自分は、基本書には一切手を出さず、伊藤塾のテキスト、判例百選のみで司法試験に合格することができた。自分は、有名難関大学の学生でも 20 代の頭の柔らかい若者でもなく、記憶力の低下した頭の固い年代に属する。申し上げたいのは、何度も同じ教材を繰り返すこと（19 司 43 頁）。
- ⑦ 基礎マスターでインプットしたことを論文マスターでアウトプットした。その際、何回も基礎マスターのインプットに戻った。この地道な作業の繰り返しが後々役立った（19 司 205 頁）。
- ⑧ 徹底的に基礎マスターテキストを繰り返し読んで理解する、という行為が私の「基礎知識は絶対に間違えない」という強さの根源を形成していったと思う（17 司 126 頁）。
- ⑨ 結局のところ司法試験合格に必要な知識の 9 割は基礎マスターに詰まっているといっても過言ではない。問題は、それを何度も繰り返して精度を高めていくことができるかということ。いかに反射的に吐き出せる知識にするか、自分の中の常識にするかという点につける（17 司 235 頁）。
- ⑩ この勉強は螺旋階段を登るようなもの。風景が変わらず同じところをぐるぐる回っているように見えて、実は少しずつ高い所に登っている（17 予 51 頁）。
- ⑪ 講義が終れば次の講義までに 3 回復習をし、理解を深めた。初期段階では、全体像をつかみづらく間違った方向性の勉強をしてしまうことが多いので、定期的に基礎マスターテキストを最初のページから読み直した（17 司 213 頁）。
- ⑫ 「基礎マスターが一番重要」といわれていたので、基礎マス段階においてはスケジュールどおりに通うことと、復習に力を入れることを意識して学習をしていた（17 司 136 頁）。
- ⑬ 毎日塾のブースを利用して復習時わからない箇所が出てくるたびに当該箇所を聴き直すという作業を繰り返した。このような勉強法によりわからない箇所がどんどん減っていき、短期間で集中的に基礎を身につけることができた（18 司 72 頁）。
- ⑭ 伊藤塾の教材を愚直に繰り返し、自信をもって試験場に向かうことができたことが、本試験合格の勝因であったと思う。伊藤塾が提供するカリキュラム・教材・講義は、たしかに実績を生み出すだけの力がある。本番でたくさんミスをしたが、それでも合格できたのは、伊藤塾で培った基礎力への自信があったからだと思う。皆さんも、伊藤塾をフル活用して自信を身につけ、合格を勝ち取っていただきたい（18 司 109 頁）。

## 7 手を広げない

### (1) 塾のテキスト以外に手を出さない

- ① 予備試験も司法試験も基礎が問われる試験であることを、皆忘れがち。むやみに難しい試験だと思い込み、難しい参考書や基本書に手を出すことは一番やってはいけない



(19 司 122 頁)。

- ② 基本的なことを押さええていれば合格できる試験なので、そこを常に意識して勉強すべき。あの問題集がとか、あの基本書がなどという人がいるが、伊藤塾のテキストを完璧にするのが最優先で、それでも時間が足りないくらいなので、その意見に耳を傾ける必要はない (19 予 150 頁)。
- ③ 合格者のコメントを見ていると与えられた教材を徹底的にやりぬいたというものが一番多かったが、まさにやることを絞って徹底的にやり抜くことが大事 (19 予 59 頁)。
- ④ 法学部以外でゼロから学習を開始した自分でも、伊藤塾の教材だけで合格することができた。あまり外野の声に惑わされずに、塾の教材を信じて学習すれば合格は自ずと近づいてくる (19 司 56 頁)。
- ⑤ 早期合格のために必要なことは、手を広げすぎないこと。同じテキストで何回も繰り返し勉強していれば、人間は飽きてくるものだが、そこは堪えて頑張してほしい (19 司 96 頁)。
- ⑥ 伊藤塾の教材は、重要なところにポイントを置きながらも、必要な知識が完全に網羅されていることから、伊藤塾の教材以外の教材を学習する必要はない (19 司 27 頁)。
- ⑦ 予備試験合格に必要な法律の基礎知識は全て伊藤塾の基礎マスターから得た。文字どおり全てであって、他の基本書や参考書は一切使っていない (17 予 36 頁)。
- ⑧ 難しい基本書や演習書、法学雑誌、論文にまで手を出す人がいるが、司法試験合格には不要。基礎マスターは合格への必要十分な基礎・基本が十分つまっており、これを完璧にマスターすることが合格への最短ルート (17 司 262 頁)。

## (2) 塾のテキストに絞って学習する

- ⑨ 伊藤塾の教材は多くの受験生が利用していることから、教材に載っている以外の知識が本番で問われたとしても少数派に回ることがないという安心感が一番の売り。教材を押さえたら知識面で他の受験生に劣ることはないと信じて、伊藤塾の教材のみ使いつくすことを目指した (19 予 33 頁)。
- ⑩ 基礎マスターテキストは非常に優秀なテキスト。合格のために必要な知識が十二分に詰め込まれている。巷には様々な専門書、解説書が溢れているが、まずは基礎マスターを完璧にすること。「試験で使えるのは、百の曖昧な知識ではなく、十の磐石な知識である」との講師の言葉を信じて基礎マスターを完璧に学習すると、どれほど真新しい問題であっても難なく解けるようになっていた。複数人のプロが多角的な視点から作り上げた基礎マスターテキストは、難解な専門書と比べて非常にわかりやすく、かつ簡潔に要点がまとまっており、この業界ではナンバーワンの教科書といえる (19 予 74 頁)。
- ⑪ 伊藤塾長がおっしゃっていたとおり、基礎マスターで配布される入門講義テキストのみで司法試験合格に必要な知識は十分身に付けることができたとともに、他の基本書などを用いる必要はなかった (19 司 81 頁)。

- ⑫ 基礎マスターに最終合格に必要な知識は全て含まれているから、他の参考書には手を出さないほうがいいとの助言を先輩方から受けていたので、徹底的に基礎マスターを読み返し、知識をインプットした (19 予 108 頁)
- ⑬ 基礎段階では、とにかく基礎マスターテキストを繰り返し復習した。他の教材には一切手を出していない。同じテキストを反復することで、だんだん復習の時間も短くなり、結果的に効率のよい学習ができた (17 司 84 頁)。
- ⑭ 予備試験・司法試験の勉強は大変だが、同じテキストをひたすらやり込む気合があれば、必ず合格できると思う。自分は、選択科目と要件事実の勉強以外は、基礎マスター、論文マスターテキストしか使っていない。それぞれ何度も繰り返し使うことが、合格への近道なのだと思う。いろいろテキストを買いたくなる気持ちはわかるが、テキストを買って読んで、それだけでなく、さらに本番で書けるようにするためには多大な労力を使う。他に手を出す必要はない (18 司 40 頁)。
- ⑮ 実質 3 年程度しか勉強しなかった自分が合格できたのは、手を広げずに教材を絞ったことと、短期間で集中して取り組んだことが理由。伊藤塾では合格に必要な教材とスケジュール管理は与えられているので、あとは基礎マスター・論文マスター・過去問をひたすら繰り返して知識と表現を洗練させれば自然と合格できる (18 司 135 頁)。
- ⑯ 予備試験合格に必要な知識は、基礎マスターで 100%得られる。合格できないとしたら、知識が足りないのではなく、理解し切れていないか、知識の使い方を分かっていないことに起因すると思う。自分は論文試験に 5 位で合格できたが、基本書などはほとんど用いていない。結局、基礎マスター以外に手を広げてきちんとおさえることができる天才などはほとんどおらず、かえって知識に振り回され弊害が生じる (18 司 165 頁)。

### (3) 情報の一元化による学習効率アップ

- ⑰ 演習で気になった点、間違っ点は基礎マスターテキストに書き込んだり、間違ったびに線を引くなどして協調したりするという「情報の一元化」を強く意識していた (19 司 88 頁)。
- ⑱ 基礎マスターテキストは体系別・分野別に整理され、自分でメモができる余白が多く残され、書き込みをしやすいバインダー形式になっており、「ここをスタートとしてどんどん知識を積み上げていく」ことをここまで意識している教材は他にはない (19 司 139 頁)
- ⑲ 結局基礎マスター以上のことはやる必要はなく、最終的には基礎マスターに答練や他の教材など、全ての知識を集約し、演習問題を解きつつ、一日ですべて見返すという勉強になった。「情報の一元化」が重要。(19 司 218 頁)

## 8 全体像を把握する

- ① 法律の学習は完璧に理解できてから先に進もうとすると、一向に前に進めなくなる。一応の理解でも構わないので、とにかく次々と講義を進めていくことが重要。講義を先に進めるにつれて前の部分の理解も深まり、テキストを何度も読んでいくうちに分かるようになる (19 司 159 頁)。
- ② 初期段階では、とりあえず全科目の全体像をつかむことが優先。法律の科目は相互に関連しており、全体として理解を深めていくことが効果的 (19 司 147 頁)。
- ③ 失敗した点は、最初に全科目を一周する際に時間をかけすぎたこと。とりあえず一周してからでも、また戻って不安な部分を勉強することができるので、なるべく早く一周することが大切 (19 司 160 頁)。
- ④ 基礎マスター、論文マスターはとにかく早く一周を終えるように意識して学習した。その結果最初の一周の予習・復習はおろそかになったが、全体像の把握を早めにするのができ、二週目、三週目にスムーズに入ることができた (19 司 92 頁)。
- ⑤ よくわからないところはスルーしてしまっている。2回目、3回目とその科目を復習する中で理解できることが多い。1回目は気楽にその科目の全体像を把握できればいいくらいの気持ちで臨むのがよい (19 予 147 頁)。
- ⑥ 時間がなかったため、講義を1.5倍速にして、空いている時間を使いながらとにかく短期間ですべての講義を視聴し終えるように心がけた。結果的に必要な学習量の全体像を把握することができたのでよかった (19 司 161 頁)。
- ⑦ 基礎段階ではとりあえず全科目一通り勉強するという方針で勉強した。法律学は前から順番に勉強していけばわかる学問ではなく、全体を勉強してはじめて最初に勉強したことの意味がわかるという特徴を持っている (17 司 256 頁)。
- ⑧ 基礎マスターをとりあえず一回聴くことが重要。初学者にとって基礎マスターはわからないことだらけで、復習をしてからにしようと思ってしまう人も多くいる。しかし、一回で理解することは不可能。わからないところも、その後の勉強で必ずわかるようになる。それにも関わらず1回で理解することにこだわって受講を遅らせても合格が遠のくだけ (17 司 104 頁)。
- ⑨ どの章にどのような話があったかなど、目次を意識して全体像をつかんでいった (17 司 134 頁)。
- ⑩ 目次を意識した勉強法を講師が口を酸っぱくしておっしゃられていたので、目次を眺めながら内容を思い出すという勉強法をとった。目次という引き出しの中に知識を整理していくことで、自ずと法律の体系に沿った知識が身につけていった (17 司 336 頁)。
- ⑪ 伊藤塾長がよく「基礎マスターの目次を大切にしろ」とおっしゃる通り、法体系の理解は法を学ぶ上で根幹にあたる (18 司 196 頁)。

## 9 優先順位をつける

- ① 法律学の世界はとても奥が深く、予備試験に合格するうえで知識として不要なものも多くある。初学者の段階から枝葉の部分にあたる知識まで修得しようとするのは極めて非効率かつ非現実的だが、初学者にとってそもそもどの知識が必要で、どの知識が不要なのかを選別すること自体も困難。塾の講義では、幹となる重要知識の選別を実績のある講師が行ってくれるため、初学者であっても取り組みやすい（19 予 60 頁）
- ② 予備試験の勉強をして感じたことは、無限にある法律の知識をいかに優先づけをして、大事なものから自分のものにできるかということ。ただ、勉強しているだけでなく、受かるための勉強をしているかを常に意識しながらやっていかないと時間がいくらあっても足りない（19 予 144 頁）。
- ③ 基礎学習においては、講師が確実に記憶するように指示した部分などは完全に覚えるようにし、相対的に重要でないといった分野は分量を落とすなどして、限られた時間を有効活用するようにした（19 司 56 頁）。
- ④ 伊藤塾のテキストは、試験との重要性から各項目にランク付けがされており、何を勉強すればいいかで迷うことは全くなかった。効率的に勉強することができ、大学生活を充実させつつも在学中に予備試験に合格し、無事司法試験に合格することができた（19 司 35 頁）。
- ⑤ 基礎マスターの段階では、Aランク、B+ランクの知識を確実に身に付けることが重要。問われる論点の多くは、結局これらの基本知識をどれだけ深く、根本から理解しているかを問うている。自分は、これらの知識を単語カードにまとめ、風呂や通学時間などのスキマ時間に何度も何度も確認した（19 司 208 頁）。
- ⑥ 最初の頃は、勉強に対する意識が低く、講師が指示したところの暗記をサボりがちだった。そのため、短答式試験の点数の伸びが悪く、基礎マスター段階でやるべき暗記を論文マスター段階でもやることになり、予備試験突破に想定より1年かかってしまった。講師が覚えるように言うことは必ず意味があるので、素直に指示どおりにやれば短期合格もみえてくるはず（19 司 177 頁）。
- ⑦ 基礎マスターでも、論文マスターでも講師が論点や問題ごとに重要度を教えてくれるので、テキストの量が多少多くてもメリハリをつけて学習することができ、効率よく基礎固めができた（19 司 306 頁）。
- ⑧ 司法試験は短答から論文までを通してA+、A、B+ランクの知識がしっかり身につけていけば、十分合格ラインに達することができる（17 司 114 頁）。
- ⑨ 試験で問われたのもAランク、B+ランクの論点がほとんどであったので、ポイントを押さえた学習をすることが合格への近道（17 司 250 頁）。
- ⑩ 伊藤塾ではランク付けシステムが導入されているが、何を最優先で勉強すべきであるかということが当該システムによって明確化され、効率的な勉学のために非常に有益だ

った (17 予 308 頁)。

- ⑩ 基礎マスターにおけるランク付けは、勉強のウエイトの目安となり、全体をさらわねばならないという危機感から解放してくれる大切な指標となった (18 司 109 頁)。

## 10 限られた時間を活用する

### (1) スキマ時間を活用する

- ① 意外とスキマ時間は積もれば大きい。往復で通学に2時間要していたため、1週間で10時間、1ヶ月で40時間学習時間が増えたことになる (19 予 51 頁)。
- ② 通学に片道2時間かかるところに住んでいたが、自分にとってはむしろアドバンテージ。電車に乗っても他にやることがないので、飽きても勉強をやらざるをえない。通学時間だけで、基礎マスターテキスト、論文ナビゲートテキストを3周ずつ読むことができた (19 予 75 頁)。
- ③ 短答試験については、電車などの空き時間に伊藤塾学習支援システムを活用した。一問一答形式でも、過去問形式で演習できる点がありがたかった (19 司 32 頁)。
- ④ 伊藤塾の学習支援システムのおかげで、テキストを広げられない通学の満員電車の中でも携帯電話を利用してオンラインで問題を解くことができ、時間を効率的に使うことができた (19 司 28 頁)。
- ⑤ 通学中の電車の中で伊藤塾の「学習支援システム」を利用することを中心に短答の対策を進めた (19 予 30 頁)。
- ⑥ 学習支援システムを活用した。このシステムでは、各肢について条文問題、判例問題、学説問題をソートして解くことができ、試験一週間前頃からの条文の詰め込みに非常に役立った。通勤時間などに、ゲーム感覚で解けるのがよかった (19 予 62、63 頁)。
- ⑦ 短答の問題演習はスマートフォンを利用して取り組むことができたので、移動中や待ち時間といったスキマ時間にも取り組んでいた (19 司 117 頁)。
- ⑧ 電車での勉強のコツは、スマホアプリの電子六法と、塾の学習支援システムを上手く活用すること。このシステムは、片手でも非常に勉強しやすく、車内でも十分に過去問を解くことができた (19 予 75 頁)。
- ⑩ 電車に乗っている間や歩いている時間など空き時間を無駄にしないように勉強した。特に、定義の暗記は、駅から大学まで歩きながら行った (17 司 77 頁)。
- ⑪ サークルにそこそこ参加し、司法試験を受ける2カ月前くらいまでバイトをしていたので、電車での移動時間は基本的に暗記するために使い、答練を受けた日は帰りの電車でその日の問題を振り返り、自分は何ができていなかったのかを確認するようにしていた。答案を書くためにはまとまった時間が必要なので、それ以外のインプットの時間をなるべくスキマ時間で行うことが大事 (18 司 126 頁)。
- ⑫ 短答式には苦手意識があり、直前期の詰め込みに賭ける勇気が湧かなかった。毎日20

分ほど電車に乗る時間があったので、iPadで伊藤塾生学習支援システムを利用し、車内で1日2～3問でも過去問を解いていた（18 予 32 頁）。

- ⑬ 家でぼーっとする時間を10分減らして勉強に充てるだけでも、一週間あると1時間になる。そのように小さな工夫をすることが大事（18 予 117 頁）。
- ⑭ 週3回アルバイトをしていましたが、空いている時間を有効に使って十分な勉強時間を確保していた。歯磨き、食事の時間以外にも歩いているときも覚えた論証を再生し、記憶の定着を図ると効果的（17 司 213 頁）。
- ⑮ 大学の空きコマ時間は、必ず予備試験の勉強をすると決めていた。サークルやアルバイトは入っても大学の授業後であるので、空きコマの活用はコンスタントな勉強時間の確保につながった（18 司 76 頁）。

## (2) 勉強する場所に囚われない

- ⑯ 移動中や家の掃除中などに法律知識を耳で聴くことで記憶を図っていた。こういった暗記の学習は机に向かわずともできるので、工夫して効率化を図るとよい（19 予 61 頁）。
- ⑰ 入学直後にはじめたサークル活動の影響でまとまった時間を確保するのが困難であった自分にとって、いかなる場所でも受講でき、空いた時間に効率よく講義を消化できるWeb受講制度は大変ありがたかった（19 司 221 頁）。
- ⑱ Web受講だと時間・場所を問わず受講することができるので、大学にノートパソコンを持っていき、授業のない時間は図書館で受講を進めた。曜日ごとに、必ず何コマは進めると決めておき、無理矢理でも受講し、登下校時に復習した（19 予 270 頁）。
- ⑲ 運動部に所属し、通学も往復3時間かかるため、机に向かう時間があるときはひたすら講義を聴き、それ以外の通学時間などは暗記に努めるなど、生活場面ごとにやる勉強を分けていた（17 予 25 頁）。

## (3) メリハリをつけて勉強する

- ⑳ 司法試験の勉強をするにあたっては、メリハリをつけるということがとても大切。勉強を集中してやる、息抜きでリフレッシュする。完全に暗記する部分と結論だけ押さえる部分のメリハリ、試験勉強と学校での勉強のメリハリなど、自分でしっかりと意識しながら過ごすことが必要（17 司 245 頁）。

## (4) 教材を加工し持ち歩く

- ㉑ 伊藤塾で覚えなさいといわれた定義や判例の言い回しなどをまとめたプリントを常に携帯していた。通学時間やアルバイトの帰り、トイレなどでも常にそれを見て学習していた。また、アルバイトやサークル帰りの日は必ず眠くなる。そういう時は、定義などをひたすら書いた。講師からは、眠い時は判例を読んだりするともっと眠くなるから、眠い時でもできる暗記をやりなさいとのアドバイスを受けていた（18 司 208 頁）。

- ⑫ 学習当初は概念の修得が重要なので、単語カードを常に携帯し、電車やバスでも常に見ていた (18 予 152 頁)。

## 11 アウトプットを意識した学習をする

### (1) 学習効率上、インプットとアウトプットは不可分

- ① アウトプットをすることで、インプットとしてどの範囲まで知識を修得すればよいか  
が明確になる。アウトプットの学習をすることはインプットの学習を減らすことにつな  
がるので、たとえインプットが不完全な状態であっても積極的にアウトプットの時間を  
確保するとよい (19 司 48 頁)。
- ② 基礎マスターの段階では、まずは次の年の短答に合格しようという目標を持っていた  
ので、基礎マスターの講義後すぐにその日の該当範囲の過去問を解き、間違えた問題に  
チェックをつけるということを意識していた (19 司 88 頁)。
- ③ 伊藤塾に入ってすぐに言われたのが、来年の予備試験の短答式試験合格を目標とする  
ということ。基礎マスター講義を並行して、短答式を勉強することで、短答の勉強を論  
文の勉強にも活かすことができるようになった (19 司 108 頁)。
- ④ 一年目のインプットの段階から基礎マスターゼミで先輩受験生の論文添削を受ける  
ことで、予備試験・司法試験で基礎マスターの知識がどのように使われるのかを早期に  
知ることができた (19 司 93 頁)
- ⑤ 一通りインプットが終わったら、すぐにアウトプットを重点的に行うべき。なぜなら、  
その法分野の体系的理解、論点の意義・使う場面がおのずと見えてくるため、インプ  
ットの効率・質があがる (17 司 76 頁)。
- ⑥ 基礎マスターには論文答練がついているが、なるべく早いうちから受けておくとい  
うのが重要。答練に出て、どんな知識が必要なのか、どんな風に基礎マスターを受ければ  
よいのかというのを確認した方がよい (17 予 74 頁)。
- ⑦ 基本的な法的知識が十分でない段階から、基本的な論文の書き方(法的三段論法など)  
はマスターできるよう自分で答案を書いてみるようにした。このようにすることで自分  
が弱い部分を知り、インプットにも活かすことができた (17 司 116 頁)。
- ⑧ 伊藤塾の教材を全て完璧にすれば司法試験に合格できるのは当然だが、自分に足りな  
い知識は何なのか、司法試験に本当に必要な知識はどれか、自分で判別できるようにす  
ることが一番重要。そのためにも、インプット段階からアウトプットのことを意識して、  
論文の過去問で出題された知識はどういったものなのか、その問われ方、といったこと  
を具体的にイメージして知識修得に努めるよう心がけた (18 司 127 頁)。
- ⑨ 他の人がどのくらい書けるのかを知るために論文マスターゼミを受講して自分の位  
置を客観的に把握することに努めた。そして、早い段階から過去問演習をはじめ、予備  
試験や司法試験のレベルを知った上で勉強するようにしていた (18 司 143 頁)。

## (2) 試験科目以外でも試される「書く力」

- ⑩ 司法試験対策の学習では、当然基本的な法律の知識を修得することが大前提になるが、「文章を書く力」が非常に重要。同じようなことを書いているのに全く評価が異なる答案をよくみるが、その原因は、論点相互の論理関係、文章の流れ、日本語表現の巧拙などに起因する（19 司 302 頁）
- ⑪ 司法試験は限られた時間において、手で書く試験。自分の手で書いていくなかで、実際の論文試験に活かせる知識とそうでない知識が整理され、時間内で書いていくことで、実際の論文式試験で読みやすく短時間で書ける文章表現も身についた（19 司 201 頁）
- ⑫ ほとんど答案を書いたことのない人は、頭では分かっているがうまく表現できなかったり、自分の筆記速度を認識しておらず時間配分ができないなどの問題に必ずぶつかる。書く練習は何より大事（19 司 128 頁）。
- ⑬ 時間制限を課して演習することで、自分の出力（筆記速度、页数あたりの文字数）の限界はどこか、どの段階またはどの箇所に時間をかけてしまっているか、答案構成や悩む時間を短縮することができないかなどの課題が見えてくる（19 司 239 頁）
- ⑭ 司法試験で苦労した点は、二時間で問題文を読み手書きで答案構成をするとすると、思考に充てられる時間がほとんどないこと。答案を読む時間と答案構成で 30 分、答案を書くので 80 分（1 枚 13 分で約 6 枚）、見直し 10 分というのをデフォルトにしていたが、問題文が長いほど思考に充てられる時間は少なくなり、10 から 20 分程度しかない。答練や模試は、このような極限状態での答案作成の訓練として役立った（19 司 219 頁）。
- ⑮ 模試に関しては、本番がどのような雰囲気なのか、本番でどのくらい疲れるのかというのを体験するためにも、ぜひ受験するべき。一日の最後の方になってくると手が疲れてきて、書くスピードが落ちてくるため、本番はそれを考えて時間配分をすることができた（19 司 97 頁）。
- ⑯ 論文式試験の対策で重要なことは、実際に答案をたくさん書くことだと思う。特に司法試験は本当に時間が足りなくなる試験であるため、時間内に書くべきことを書ききる力を身につけるためにも、答案を実際にたくさん書くという作業は大切（18 司 73 頁）。

## (3) 他人に答案を読んでもらうことの重要性

- ⑰ 司法試験の合格に必要なことは、自分の頭で考えたことを正確に表現することだと思う。自分の頭で理解したことでも、それが伝わらなければ合格することはできない。自分の理解が正確に伝わるかを自分だけで確認することは困難なので、答案を書いたら多くの人に見てもらうことが大切（19 司 76 頁）。
- ⑱ 塾では、強制的に論文を書く機会が設定されており、未熟な答案なりに丁寧な添削やアドバイスをもらえたことは、思っていた以上に実力養成につながった（19 司 24 頁）。
- ⑲ 当初基礎・応用を問わずとにかく知識を身に付けることに努めたが、テキストを目で追って読むだけの勉強では限界があることを痛感し、知識が不十分のままでも、とりあ



えず過去問や答練の問題を手を動かして答案に書く、あるいは構成してみるというアウトプットをひたすら繰り返した (19 司 31 頁)。

- ⑳ 論文式試験はすべて手書きで行われるため、実際に自分の手でいかに多く答案を書くかで合否が決まる。インプットが済んでいないから答案を未だ書かないという方がいるが、合格水準に達するには、アウトプットを一刻も早く開始することが必要 (19 司 126 頁)。
- ㉑ 基礎マスターゼミの時から司法試験合格までを通じて、論文の勉強で意識していたのは、自分の書いた答案を人に見てもらふこと、そして人の答案を見ることである。自分の弱点が分かり、人の良いところを盗むことができるので、よかった (18 司 75 頁)。

## 12 仲間をつくる、ゼミに参加する

### (1) 仲間と学習するメリット

- ① 人間は一人では生きていけないという言葉は本当で、司法試験受験においても同じことがいえる。一人で黙々と勉強するよりも、よき友人と切磋琢磨し合いながら勉強をしている人の方が比較的合格しやすいように感じる。受験生の皆さんはぜひ、よき友人とともに合格を目指してほしい (19 司 217 頁)。
- ② 一人で勉強する時期は、分からないことが不安で本当に苦しかった。そんな時は誰かと話し、勉強してみてほしい。皆分かっておらず、思っている以上に皆はできない。他人を見ることで、自分の立ち位置を知ることができる (19 司 94 頁)。
- ③ もっぱら一人で学習しており、他の受験生がどのくらいの知識を持って試験に臨んでいるのかということがつかめなかったが、周囲に仲間が出来たことで、受験生の現実的なレベルを知ることができた (19 司 29 頁)。
- ④ 当初は、勉強というのは独りで頑張るものであり、周りはみな蹴落とし合うライバルのように思っていた。だが、長く勉強をするにつれて、自主ゼミも多くやるようになり、敵と思っていた周りは、勉強と一緒にやってきた同志のように感じ、ときに助けられた。このような感覚になれたのは、伊藤塾に入っていたからにほかならない (18 予 44 頁)。
- ⑤ 勉強だけの生活では息苦しくなってしまうが、そんな生活を風通し良くしてくれたのは伊藤塾の友人。自主ゼミを組んで集まったり、講義などで友人に会い、おしゃべりすることでリフレッシュすることができた (17 予 61 頁)。

### (2) 塾での仲間づくり

- ⑥ 勉強を始めたときには周りに誰も勉強仲間がいなかったが、基礎マスターゼミや、予備試験、司法試験ゼミなど、伊藤塾の様々なゼミなどを通じ、一緒に切磋琢磨する友人ができた (19 司 30 頁)。
- ⑦ 伊藤塾での一番の財産は、ともに勉強し、情報を収集できる仲間を得られたこと。こ

のかけがいのない仲間とともに合格できたことは自分の誇りであり、これからの人生においても頼もしい存在（19 司 59 頁）。

- ⑧ 伊藤塾に通った最大のメリットは、切磋琢磨する仲間に出会えたこと。予備試験の論文・口述段階の対策は仲間と協力していたので、かけがえのないものを得られたと感じている（19 司 91 頁）

### (3) 仲間とチームを作る

- ⑨ 講師から指示された問題を、毎回実際に時間を決めて書き、講義前に友人と自主ゼミを組んで議論して、講義に臨むというルーティンで勉強を継続した。とても優秀な友人に恵まれたおかげで、一人講義だけなら継続できなかった勉強を続けられたし、現実的な合格ラインの答案がどのくらいなのか肌身で感じられたり、その友人に負けたくないというモチベーションになったりと、とても刺激になることばかりだった（19 司 88 頁）。
- ⑩ 長い受験生活だったが、伊藤塾の講師の方々は熱い講師ばかりであり、友人らとゼミを組み励まし合いながら勉強することによって、合格までたどり着くことができた（17 司 47 頁）。
- ⑪ 司法試験は自分で勉強することも重要だけれども、仲間との団体戦という側面もある。仲間とともに勉強して、情報を交換して、一緒に乗り越えていくことが重要（18 司 206 頁）。

## 13 相談する

- ① 初年度の合格発表では大変くやしい思いをしたときは、伊藤塾のカウンセリングを受け、何が自分に足りなかったのか冷静に自己分析することができた。この機会がなければ、今年も弱点を克服できず合格できていなかったかもしれない（19 司 155 頁）。
- ② 司法試験は正しい方向性で勉強を続けていれば必ず受かる試験だと思う。なので、もし勉強の方向性に不安をもっていれば、気軽に伊藤塾のスタッフに相談してその方向性が正しいかを確認すべき（18 司 143 頁）。
- ③ 伊藤塾には確かな合格実績があるので、与えられたものに不安を覚え、勉強できる点がよかった。伊藤塾ではカウンセリングで悩み相談をしてくれたり、校舎に行けばすぐにアドバイスをしてくれたので、何度も救われた（18 予 113 頁）。
- ④ 毎月電話で勉強計画について相談をさせてもらい、バックアップ体制にも非常に満足している（18 予 141 頁）。
- ⑤ 少しでも勉強方法に迷ったら、できるだけ早くカウンセリングを受けることをおすすめする（17 司 91 頁）。
- ⑥ 伊藤塾のスタッフには、学習が進んだ後にも、親身に相談に乗ってもらい、何度かアドバイスももらった。適切なアドバイスをしてもらえるので、学習に行き詰った人は、一人

で悩まず相談しに行くべき（17 司 105 頁）。

- ⑦ 勉強が進むにつれ、疑問に思う箇所が増えていき、塾の質問制度を利用するようになった。毎週決まった時間に質問をして、疑問を解消していった（17 司 199 頁）。

## 14 合格後を考える

- ① 伊藤塾を利用してよかった点は、伊藤塾長のおっしゃるとおり、合格後を考えて、視野を広くして勉強できたこと（19 司 73 頁）。
- ② 法学部出身でなく、周りに弁護士の知り合いもほとんどいなかったが、伊藤塾の「明日の法律家講座」で様々な分野で働く弁護士の話を聴くことで、独学では得られない情報を得ることができ、大変有難かった（19 司 212 頁）
- ③ 司法試験や予備試験の合格は高い壁のようにみえるが、努力は必ず報われる。しかし、その壁だけ見続けていると、壁を乗り越えた後に何をすべきか分からなくなるかもしれない。そんなときは伊藤塾の明日の法律家講座などに参加して自分がなぜこの試験を目指すようになったのか、試験に受かった後どのような法曹を目指すのか漠然とでもよいので考えておくとうい（19 司 293 頁）
- ④ 試験は難関で大変なものだが、それだけに注力すると、視野が狭くなってしまう。その点を踏まえて、合格後を考えることのできる伊藤塾のカリキュラム及び指導方針は素晴らしいものであったと思う（19 予 71 頁）
- ⑤ 伊藤塾では、常に「合格後を考える」ということの大切さを学ぶことができた。合格後は、初心を忘れることなく常に自分が法曹を目指した理由に立ち返りつつ、真に人の役に立つ弁護士として社会に貢献していきたい（17 司 99 頁）。
- ⑥ 合格は夢をかなえるための手段にすぎない。手段と目的をはき違えることなく、常に合格後のゴールを意識しながら勉強することが、合格への一番の近道（17 司 115 頁）。
- ⑦ 伊藤塾で提唱されている「合格後を考える」という視点は、どのような状況であっても夢を諦めないということにつながると思う。勉強をして辛いときには、なりたいたいイメージを強く心に描いて乗り切った（17 予 319 頁）。
- ⑧ これから司法試験の勉強をし、辛いことも色々あると思う。しかし、そのようなときは自分が司法試験合格後に何をしたいのか、なぜ司法試験合格を目指すのかを今一度考え直してみれば、また自然とやる気がわいてくると思う（18 司 142 頁）。
- ⑨ これから司法試験を受験する皆さんには必ず受験を投げ出したくなる時が訪れると思う。そんな時は、一旦手を止めて、合格したら自分のやりたいことをやることのできるんだと希望を持ち直すと、上手く気持ちが切り替えられる（18 司 167 頁）。
- ⑩ 司法試験に受かった今、司法試験に受かることを目標とするだけでなく、その後のビジョンを描いてきたことが色々な場面で役に立っている。伊藤塾で学ぶ後輩の皆さんも、ぜひ合格後のビジョンを思い描きながら日々の勉強に励んでいただけたらと思う（18 司 192

頁)。

- ⑪ 自分は、グローバル化する現代において日本が海外に進出するにあたり生じる様々なトラブルや紛争を予防・解決する法律家を目指し、司法試験を受験した。司法試験合格はひとつのスタートラインにすぎないが、合格することにより自身の夢を実現する大きな推進力となる。これから司法試験を目指される方も、合格後を考えつつ、目の前の司法試験に全力に立ち向かい、ともに社会を支える法律家となられることを期待している (18 司 196 頁)。
- ⑫ 司法試験はゴールではないという講師の言葉を痛感している。試験は法曹になるための通過点にすぎず、合格後を考えるというのは大事なことだと思う (18 司 214 頁)。

## 15 公務員という選択肢も見据えた法律の学習

- ① 国家公務員の受験も考えており、法曹を目指すのか公務員を目指すのか悩んだが、準備により時間がかかるのは司法試験・予備試験であるということを知ってもらい、将来の可能性を広く残すため、司法試験予備試験の勉強を開始した (19 司 28 頁)。
- ② 大学1年の6月に入塾した。この頃は公務員志望だったが、大学の同じクラスに予備試験を受験する友人がいたため、途中で法曹志望に転換できるように早いうちから法律の勉強をしておこうと考えた (19 予 68 頁)。
- ③ 入塾したのは大学入学と同時。大学では専門的な法律の勉強が一年次には始まらないので、伊藤塾に入って一年から勉強したいと考えた。国家公務員にも興味があり、予備試験の勉強が役立つと聞いたのも入塾のきっかけの1つ (19 予 69 頁)。
- ④ 司法試験を目指そうと考えたのは大学4年の時。弁護士は単に訴訟で代理人として仕事をするにとどまらず、さまざまな社会問題を法律という専門性を活かして解決することができる仕事だと感じた。また、国連の機関で働くことにも関心があったため、弁護士の資格を持っていることでキャリアの選択肢も広まると考えた (19 予 310 頁)。
- ⑤ 当初は国税専門官に興味があったが、大学の授業で「税務の分野で活躍する弁護士」がいるということを知り、国税専門官を目指しつつも、専門技能を他人のために使う専門職になることにも興味生まれ、「税務の分野で活躍する法曹」を志すことを決意した (19 司 116 頁)。
- ⑥ 幼少時より政治に強い関心があり、国家総合職を志していたが、学部在学中に経験した議員インターンでの出来事をきっかけに弁護士に転向した (19 司 259 頁)。
- ⑦ 入学当初は司法試験を目指す気はなく、公務員や企業の法務部員を志していた。大学2年前期までは、教職課程さえ取っていたり、進路に迷走していたが、講演会に参加したりして弁護士が社会の役に立っていることを知り、周囲に法曹を目指す人が多かったこともあいまって、二年生の秋に進路を変更し、司法試験を目指すことにした (19 司 265 頁)。
- ⑧ 公務員になるつもりで法学部に入ったが、法学に触れるにつれ、これを自分の仕事とし

ていきたいと考え、弁護士を志すようになった（19 司 273 頁）。

- ⑨ 弁護士という職業に憧れを抱いたのは、大学2年生になる直前。しかし、やっと大学生活に慣れてきた頃に、孤独で過酷な勉強を開始することにとっても悩み、大学2年には民間就活のためインターンに行ったり、ビジネスコンテストに参加したり、大学3年時には国家公務員の勉強にも手を出した。結局、弁護士として働く夢を捨てきれず、予備試験に合格したいと思い、大学3年秋から勉強を開始、大学卒業年に合格することができた（19 予 152 頁）
- ⑩ 大学3年秋までは公務員志望だったが、学部の講義やゼミで法律の学習をしているうちにその面白さに気づきより現実社会で法律を運用する立場にまわってみたいと思った（19 予 261 頁）。
- ⑪ 公務員と法曹を進路希望先として考えて法学部に入ったこともあり、早めに試験の対策をしようと思っていたので、司法試験の方が勉強の負担が重く長期の勉強が必要になると判断して、司法試験の勉強を最初に始めた（18 司 28 頁）。
- ⑫ 自分はずっと国家公務員志望であり、天下国家に尽くし国民の利益を増進することを強く希望していた。公務員試験では官庁訪問で採用を得ることが叶わず、一時絶望しかけたが、法律家であれば、国家国民のために働くことができるであろうと考え、法律家の道を志した（18 司 237 頁）。
- ⑬ 大学受験の際、両親、兄弟と同じく公務員になるため、法学部を目指した。その後、自分の将来を具体的に考えるにあたって、何かしら成し遂げた経験がほしいと考えるようになり、司法試験にチャレンジしようと思うようになった（18 予 212 頁）。
- ⑭ 最初は公務員と弁護士とで迷っており、とりあえず選択肢を広く残すために予備試験に向けた勉強をはじめた。1年ほど勉強するうちに、大学の授業やゼミなどで弁護士としてできる仕事に魅力を感じ、司法試験を目指すことに決めた。結局法曹を目指すとしても法科大学院受験のための勉強は必要であり、早めに勉強をはじめて短い勉強期間で合格できたのはよかった（17 司 35、36 頁）。
- ⑮ 自分はずっと官僚志望で、伊藤塾を訪問したのも、国家公務員試験の情報収集をするためだった。しかし、ガイダンスで聴いた伊藤塾長の講演に心を動かされ、そこで法律家の魅力に気づかされることになった。国家公務員試験の法律区分と司法試験とは受験科目が似ているので、ひとまず、両方の試験に合格することを目指してみようと思い立って、入塾を決意したのが最初のきっかけだった。その後、法律の勉強を進めていくうちに、高度な専門知識を活用することのやりがいや弁護士の活動領域の広さに魅力を感じ、徐々に司法試験合格こそが、自分の進むべき道の先にあると信じるようになった（17 司 36 頁）。
- ⑯ 大学入学当初は公務員になろうと考えていたが、在学中のブラジル人支援団体の活動において、日本におけるブラジル人の不当解雇問題に携わる弁護士の講師の姿を拝見し、自分自身の力で直接的に人を救うことができる仕事に非常に魅力を感じた。また、法律の勉強自体も好きだったため、専門的に法律を扱う仕事がよいと思い、弁護士を目指すこと

を決断した（17 司 166 頁）。

- ⑰ 大学に入学したときは、公務員か弁護士のどちらかになろうと漠然と考えていた。法学部で法律の勉強していくなかで、具体的事案のもとでどう個別の主体や利益に向き合っていくか、という法曹の仕事の在り方に魅力を感じ、司法試験を目指すことにした（17 司 204 頁）。
- ⑱ はじめは公務員試験とどちらにするか悩んでいたため、とりあえず法律の勉強を試みようくらいの気持ちではじめたが、伊藤塾長の講義を聴くにつれて法律を学ぶことの面白さに気付き、在学中の予備試験合格を目指そうと決意した（17 予 84 頁）。
- ⑲ 自分は、幼い頃から国際機関で国際公務員として活躍するのが将来の夢であり、法曹の資格があれば、自分ができる仕事や成し遂げられるタスクの範囲が大幅に広がると考え、弁護士の資格を得ようと思うに至った。伊藤塾の入塾したきっかけは、司法試験受験指導校であれば圧倒的に伊藤塾がよいという周囲の評判を参考にしたためだった。法曹を目指そうと決意したところ、やるなら早く始めた方がよいとの家族のサポートがあり、大学入学直前に伊藤塾に入塾した（17 予 174 頁）。
- ⑳ 自分は2年生の10月頃に伊藤塾に入った。それまで、特に目標もなく漠然と官僚になりたいと思っていたが、法曹になるにせよ、官僚になるにせよ、法律の勉強をしておけばよいと考えたのが入塾した理由だった。予備試験や司法試験を目指す友人は、遅くとも2年生の春には受験指導校に通っている人がほとんどで、自分には到底無理だろうと思っていた（17 予 210 頁）。
- ㉑ もともと公務員を志望しており、その延長で法律家の資格を取ることを目指した。自分は法学部出身でないうえに、法律の勉強を本格的に始めたのはここ2、3年だった。これから勉強される方は絶対に伊藤塾に通った方がいいと思う。勉強の効率が段違いによくなるのは明らか（17 予 451 頁）。